

自分の個性

相洋中学校 一年 小柳 璃良

私は四歳の頃に吃音だと診断された。吃音とは言葉をくり返したり、言葉につまんでしまったり、言葉を伸ばしてしまうことだ。吃音は治りはしないが、リハビリをしているため、昔と比べればよくなっている。

私は緊張する場面で出やすくなる。そのため、発表などをする時は毎回緊張し、上手く話せないことが多い。それを見ていた人に、自分の吃音を真似されたこともあった。そのことがすごく嫌だった。

自分に吃音があることを周りに伝えたいけれど、また嫌なことをされるのではないかと思うと、伝えることができなかった。だが、このような経験をしたことがあるのは私だけではないと思う。

「みんなと違うから」という理由で人を馬鹿にしたり、傷つけることが起きてしまうのはとても悲しいことだと思う。私は他人と違うことはいいことだと思っている。

「十人十色」ということわざがある。人が十人いれば十通りの好みや個性があるということを意味する言葉だ。このことわざのように、一人一人違った個性があることは本当に素晴らしい、尊いものだと思う。最初は自分の個性に不満を持つこともあると思うけれど、誰もがプラスに考えられると、楽しく過ごせると思う。私も自分の吃音に大きな不満を持っていた。自分が思った通りに話せないのはすごくもどかしく感じる。しかし、考え方を変えてからは、上手く話せなくてもマイナスに考えてしまうことが少なくなったのだ。母から「吃音は、個性だと思うし、悪く思う必要はない。」と個性の大切さを教えてもらったからだ。

現代は多様性の時代と言われている、それぞれの違いを認め合うことを大切にしていく。多様性という考えが広まったのは最近のことだ。まだそのことを理解していない人は多くいるのだろうが、多くの人に知れ渡れば、なやみを抱える人は減るだろう。

多様性の時代と聞いて多くの人は、これから色々な人のことを認めて受け入れようと思ったかもしれない。だが、自分が多様性を受け入れる側の立場だけでなく、他の人に受け入れてもらう側でもあることを忘れてはならない。

そもそも、受け入れるとはなんだろうか。みんなが私を受け入れてくれたように、私もみんなを受け入れる。時には、自分にとって相手に苦手な部分があり、すぐには受け入れられないこともある。しかし、話していくにつれて相手を深く知ることができると思う。それが「受け入れる」ということだ。

自分が誰かを受け入れるように、誰かに自分は受け入れてもらっている。自分の個性を大切にするように、私も誰かの個性を大切にしたい。

私は吃音のリハビリの先生や、母から自分の個性の大切さを教えてもらったよう

に、個性の大切さを色々な人に伝えていきたい。それが私の目標だ。